



2002 年 10 月発行
 発行人：堺 充廣
 発行所：神戸市中央区海岸通 8
 神港ビルヂング 5 階 509
 T E L : 078-393-0050
 F A X : 078-393-0051
 E-Mail : kobekeio@dream.ocn.ne.jp
 U R L : <http://www.kobekeio.org/>
 編 集：堀 友子・八巻 晤郎

～ 9 月例会レポート ～

善塔勝一郎 (昭 41 法)

酷暑も彼岸を過ぎて本当に遠ざかった 9 月 27 日夕刻から、9 月度例会が当倶楽部ルームで開催されました。



当日の講師は、日本サッカー界の御大、三菱重工の細谷一郎氏です。長年のサッカー人生でしか得られない貴重なお話に、

倶楽部ルームを埋めた 40 人を超える会員は物音一つ立てず、真剣に聞き入っております。この辺は正にその人自身の内から溢れでる本当の話であるからでしょう。これからは選手も運営組織も観客も夫々に成熟していかねばなりません。

続いて、今年 5 月まで 5 年間にわたり当倶楽部会長をされました上島前会長に、和田現会長から感謝状が渡されました。



改めて上島時代が思い出されます。自分自身のご多忙を押しての倶楽部への献身ご努力は、誠に頭の下がる思いが致します。運営手法の確立、財政の健全化等、ど

れを取っても大事業でありましたが、それを乗り越えられました。

身近な例ではありますが、例会の都度送って頂いたスナップ写真など、誠にうれしかったものです。5 年間本当にお疲れ様でした。そしてありがとうございました。



感謝状と記念品の贈呈の後、雨の降りしきる中、席を旧居留地十五番館に移して懇親会となりました。

ヘルシーな料理がたっぷりとあり、美味しく頂きました。部屋にはいつもの通り、談笑が充満し、時は過ぎていきます。

やがてお開きとなり、ウッチーの指揮のもと細谷氏の母校の「都の



西北」の大合唱と「若き血」の大合唱のうちに、9 月例会は終わったのであります。

毎月の例会のアルバムを、倶楽部ルームに掲示しております。ご希望の方には、プリントいたします。(無料) お気軽にお立ち寄りください。

旧きを創る

時間と空間を超えた開発を

岡本 彰祐 (昭十六医)

筆者らは、非常に幸運にも、三種のかなり大型の 合計すれば年商百億を持続する 新薬を世に送ることができた。

終戦直後から始まった筆者らの研究は、組織面からみると、当初から「産学協同」という、当時としては新しい形態をとっていた。このことによって、研究は専門を越えた「学際的」なものになった。

しかし筆者は、テーマの選択では、迷いに迷った。それを決めたのは、実に深夜の上野駅だった。

山手線の深夜の電車を降り、改札口に向う途中、妻、岡本歌子が急に言い出した。「一九四二年にフランクフルトの Maschmann が書いたドイツ語の論文を先日読んだ、タンパク分解酵素に特異的な阻害物質がある、と書いている、」というのである。筆者はこれだと確信した。

* * * * *
タンパク分解酵素のひとつにプラスミンがある。その阻害物質を追究すると言うのである。注射器で血管から採られた血液は、ゼリー状に固まってしまふ。この際凝固する主役が「フィブリノーゲン」というタンパク質である。

普通の血液では、その濃度は〇・二〜〇・四％であるが、非常に変動しやすく、細菌感染などが起きると数倍になる。

では、炎症の際などにこのタンパク質はどんな働きをするのか、古くから多くの研究者が注目する課題であった。有力な見方は、このタンパク質が細菌の閉じ込めに役立つ、ということであった。

一九四六年にオックスフォードの MacFarlaneらは、フィブリノーゲンを急速に分解してしまふ酵素を発見、プラスミンと名付けた。このプラスミンの作用により、フィブリノーゲンが著しく減少すると、致死的な大出血が起きるといふ。これを避けるために、「プラスミンの抑制物質」をさがす、ということが、私どもの長期にわたるプロジェクトの目標であった。こうして約三〇〇種の物質が調べられた。

* * * * *
時は流れた。プラスミンの医学的意味は、合成抗プラスミン物質(筆者らの EACA 及び AMCHA)の作用から、逆に明らかにされた。とくに慶大医の佐藤彰一らによって予想外の発展が見られた。たとえば、妊娠の末期

ならびに月経時にプラスミンが著しく活性化され、EACAおよびAMCHAの投与により、その際の出血がみごとにコントロールされた。

また、この成績は数年後にオックスフォード等でも追試確認されている。現在、さらに、筆者らによる抗トロンピン剤の開発が進行しつつあるが、福澤諭吉の「旧きを創る」というテーゼは再び確認されつつある、としても過言ではない。

(最終回)



岡本彰祐先輩、四回にわたる連載、ありがとうございました。これからもお元気で、益々のご活躍をお祈りいたします。

来月号からは、森本周子先輩(昭二十五文)のシリーズ第二弾を連載いたします。(編集部)

Mitsuru Suganuma From S. Okamoto

会員だより

いきなり孫二人

藤井文明（昭和 39 工）

今年の 3 月に次女が初産して初孫を得た。続いて長女も 7 月に初産して二人の孫ができた。

孫はカワイイよと言われ続けてきたが、自分達に孫ができるまではそんな気には全くなれなかったのに、いざ出来てみると手放してカワイイ。誠に勝手なものだ。

生まれたての初孫を見ていて驚いたことがある。REM 睡眠をしているのだ。夢を見ている時に眼球が速く動く現象であるが、母親の胎内の暗い闇の中に長くいたのに、生まれてすぐでは目も見えていないと言うし、夢の原因となる記憶があるのか全く不思議に感じられた。小生は信じていないが前世の夢をみているのかと疑いたくなるではないか。4 ヶ月遅れで生まれた次孫は（こんな言葉があるのかどうか知りませんが）初孫に較べて小さくて抱いてやるのも怖い感じであったが、しばらく会わない期間があってから会ってみると随分大きくなった感じがした。自分達の子供は毎日顔を見ていたのでどんどん成長して行く感じはしなかったが、娘達とは同居していないのでしばらくして孫の顔を見るとすごく大きくなった感じがして頼もしい。その後順調であったが、初孫が虫に刺されたらしくそこを掻いたら膿んで、入院した上切開して処置してもらった。1 週間後に次孫までが全く同じ症状で入院した。怪我のようなことが感染する訳ないのにといぶかったが、事実である。その後初孫に会ったら小生の顔を見てもいつもの笑顔がなく、顔をそむけてべそをかき出すではないか。こうなるとかわいくなる。これまた勝手な話だ。家内や娘の詮索に依れば、前に会った時と服装が違う、眼鏡が違うことから、切開して痛い目に会わされた医師と間違えたのではとのことであったが、いやがる孫をしばらく抱いてやったらやっと思い出したようで、笑顔が戻ってほっとした。這えば立て、立てば歩めの言葉どおりのジジババ振りの日々が続くそうである。



車にまつわる話

寺本 勤（昭 46 商）

我々の世代は、ホンダ・フェアレディー・日産 3S やトヨタコロナなど、日本のモータリゼーションの幕開けと共に育ってきた年代で、特に車への憧れやこだわりは強いのではないかと思います。

学生時代のことで、下宿にはガレージはありませんでしたが家主さんは車を持っておられなかったので、厚かましく利用させていただくお願いしたところ格安で OK をいただきました。

早速、神戸ナンバーの車を持ち込み、卒業するまでの 4 年間便利にそして有意義に？利用させていただきました。

ところが、卒業直後、下宿を出てちょうど一週間後、4 年間のお礼にとお宅へ伺いましたところ、何とそのガレージにピカピカの新車がデーンと鎮座されているではないですか！！

お世話になっていた 4 年間、一度も車を購入したいとか、明け渡しをにおわすような申し入れや、もちろんいやみの一言も一切なく、小生に取りましては全く予想もしていなかった事態を目の当たりにし、下宿のご家族の皆様にも、申し訳なく、同時に感謝の気持ちで一杯になってしまいました。その時、私の驚きを察した下宿のおばさんは、「寺本さん、ありがとうございます。4 年間のガレージ代でこんな立派な車が買え、みんな大喜びです……」とお礼を言われたのです。流石にこの一言には参りましたが、4 年間本当にいいご家庭で下宿をさせていただいたのだと、改めて熱いものを感じました。

その後も、私の結婚式や娘の結婚式にと、今日にいたる 30 数年、ずっとお付き合いをいただいております。

ちょっと車に纏わる話が長くなってしまいました。が……、でもちょっといい話でしょう！！

編集部よりお願い

“〇〇の秋”を満喫されていることでしょう。
『秋』をテーマに、400～500 字程度で、皆さんの投稿をお待ちしています。

お気に入りの散歩スポット

～須磨・横尾山周辺～

宍戸 洋 (昭 58 法)

私は、神戸市営地下鉄妙法寺駅を中心に広がる横尾団地に住んでいます。この街は、通称「須磨アルプス」と呼ばれ六甲全山縦走路にもなっている横尾山・梅尾山の連山のふもとにあり、自然豊かな環境のもと、散歩スポットにはこと欠きません。その中でもお勧めなのが、2 時間ほどで素晴らしい眺望と自然が堪能できる須磨アルプス縦走コースです。

まず、横尾から西へ、横尾山の麓沿いにきれいに整備された横尾背山散策道を通って隣団地の高倉台まで歩きます。この道は住宅地から身近に自然が満喫できるすがすがしい散歩道です。

そして、高倉台から山の中を歩いて横尾に戻るのがこの縦走コースです。縦走コースの入り口へは、まず 400 段の階段を登ります。この階段を上る時にその日の体調、その時の体力が把握できます。しかし、苦あれば楽ありで、登りきったところにある展望台（梅尾山頂上）からの眺望は、素晴らしい。西側には大橋のかかる明石海峡を隔てて淡路島がどっしりと横たわり、天気によければ、友が島、家島、小豆島までが見渡せます。夕方、真っ赤な夕日が空を染めながら、その水平線へ沈んでいく光景は圧巻で、筆舌に尽くしがたい。また、東にはおしゃれな神戸市街地から大阪湾沿いの街々が、北側には整然とした西神ニュータウンが広がっています。その頂上を過ぎると、森林帯および露岩帯の中、須磨海岸を右手に見て野鳥の声や葉擦れの音をなだらかなアップダウンを繰り返し、横尾山頂、東山山頂を経て横尾団地に降りてきます。横尾山東側の岩の上からは、きらきら輝く海、近代的な神戸市街地の背後に、高取山、菊水山、鍋蓋山、高尾山、摩耶山、東六甲と、六甲連山の主峰が幾重にも重なってはるか遠くまで続いているのが見渡せます。まさに、この世に生まれてよかった、神戸に住んでよかった、と思える瞬間です。また、横尾山と東山の間には、露岩帯があり、馬の背と呼ばれるやせ尾根や鎖場、梯子階段があり、ちょっぴりスリルとアルペン気分が味わえます。

時にはコースを外れて、尾根から谷川へ降りて行くと、沢蟹に出会えることもあります。

この街に住んで 14 年になりますが、何度通っても、いつ通っても、気分がすっきりとなり、生きる元気を与えてくれる、わが人生にとってかけがえのない散歩道です。

連勝ついにストップ!!

慶早ゴルフ対抗戦

9 月 4 日、暑さが残る中、六甲山上の神戸倶楽部 (Par 62) で恒例の慶早ゴルフが行われた。

ゴルフ場までは来たものの、腰痛の状態が思わしくなく、スタート前にリタイヤとなった和田会長を欠き慶應は 5 名 (芳川、廣川、藤井、近藤、八巻) となり、上位 6 名の合計スコアで競う対抗



「今回は都の西北だ！」
木下早稲田会長 (右端)

戦は不成立。早稲田の温情で 5 名対抗となったが、芳川、廣川の女性軍の健闘にもかかわらず、男性軍が後方で踏ん張ったまま動かず、350.6 : 328.6 の大差で破れ、長かった連勝に終止符が打たれた。(記事：八巻)

同好会だより

PC 同好会

～メンバーの PC の楽しみ方～

- PC で音楽を聴いています。
- 名刺を作りました。
- 普通のカメラでも PC に取り込めますよ。
- 家計簿をつけています。
- メール・インターネット、使い方いろいろ。

できる人もワカラン人も、夫々に楽しめるのがパソコンのいいところです。

“PC よもやま話”(仮題)を次号から連載する予定です。ご期待ください。

毎月第 3 金曜に例会をしています。一度覗いてみてください。



会員の輪

宮崎 誠会員より

井上 光 (昭 35 法)

さあ、これから…

西暦 2015 年になると、4 人に 1 人が 65 才以上になるといわれている。その頃になると、自分は 80 才寸前になる。それまでは元気でいて、その 4 人の 1 人になるために、今からどんな生活をすべきか、65 才を迎えて今考える事の多い毎日だ。

長い間楽しみにしていた時間に束縛されない自由な生活ができるようになって、さて何をするか、まずは今までに興味と関心を持ちながら十分満足出来なかった事をやりたいと考えている。

それは海外旅行、水族館・博物館・美術館・古寺めぐり・遺跡探訪・英会話・パソコン・温泉地めぐり・食べ歩き等々である。

そのためには、まずは健康からと考え、今年 4 月から週 3 回スポーツ倶楽部と水泳教室に通っている。また、人生の先輩の生き様から多くを学び、友人・知人を増やすため社団法人大阪倶楽部へ入会し、講演会・ゴルフ部・旅行部・美術部等で勉強させてもらっている。

若い人との交流も大切で、その為にも神戸慶應倶楽部、芦屋三田会、北三田会、関西不動産三田会、大阪ガス三田会に入会し、若くして各界で活躍しておられる塾の後輩の皆様から、質の高い情報や意見を教えていただいている。料理教室にも行く予定で、1 週間に 1 回は家族の料理を作れることを目標にしている。その他に、故郷に月に 2~3 回は帰り、家の空気の入替えをし、草取りもしなければならない。その他切りがない。

いずれにしても、これからは何かをやってもらう人生ではなく、何かが出来上がる人生を全うしたいと今真摯に考えている。

次は、前田剛資さん (昭 39 工) にペンを譲りたい。

会員の輪をひろげよう!

新見みつ子会員より

村田幸恵 (昭 35 法)

花々のオーストリア

8 月下旬から 9 月上旬にかけてオーストリアのチロル地方、ザルツカンマーグート、ザルツブルグなどを訪ねた。オーストリアを舞台とした「サウンド・オブ・ミュージック」の映画で観た以上の素晴らしい大自然があり、手入れの行き届いた花々が街を飾り、国中花であふれんばかりで、旅人に心を込めてもてなしているようにみえた。また広場や家々のバルコニーを飾る色とりどりの花々、自然と調和した美しい歴史的な街並み、雄大で凜としたアルプスの山々、きらめく氷河、青く明るく輝く湖、そこで生まれた数々の音楽や文化。それらは豊かな自然の中で、自分たちの街への誇りと家への愛情をもって心豊かに過ごしている人々の生活を感じた。

そして、何年か前の 10 月下旬に訪れた時には、晩秋とはいえ吹雪く時もあり、山々や湖も長い冬に向かう佇まいで、同じ場所に立ちながらまるで違って見え、訪れた時の季節や天候によって、さまざまな表情を見せるということも実感した。

この旅でこれからはその時の季節を楽しみながら、同時に別の季節と景色の変化に思いを巡らす楽しみが増えた。

たくさんの思い出とともに、オーストリアの美しく可憐な花々が今も私を優しく包んでくれる。

次号は川崎洋子さん (昭 53 文) に書いていただきたい。

今月の絵



出口英雄 (昭 37 工)

